青森県総合学校教育センター　研究紀要　[2014.3]
Ｅ３－０３

小学校　学級経営

学校と保護者が信頼関係を構築するための研究
－小規模校における保護者が願う子どもの姿を目指したSST の実践を通して－

教育相談課　　研究員　　工　藤　　尚　樹

要　　旨

小規模小学校の児童に対して，保護者の願う子どもの姿を取り入れたソーシャルスキルトレーニング（以下，SST とする）を実施し，児童のソーシャルスキルを向上させることが，保護者との信頼関係を構築するのに有効であるかどうかを検証した。結果，保護者信頼度に関する一部の項目については有意に向上したが，全体的な効果は明らかにできなかった。しかし，SST に対する保護者の関心が表れる等，少ない人数であるが信頼度の向上につながる変容が見られた。

キーワード：小学校　信頼関係　保護者　ソーシャルスキルトレーニング　ソーシャルスキル尺度

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省（2008）は，『小学校学習指導要領解説総則編』において，「日ごろから学級経営の充実を図り，教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め，生徒指導の充実を図ること」や「充実した学級経営を進めるに当たっては，家庭や地域社会との連携を密にすることが大切である」と示している。さらには，「学校における教育活動が学校の教育目標に沿って一層効果的に展開されるためには，家庭や地域社会と学校との連携を密にすることが必要である。すなわち，学校の教育方針や特色ある教育活動の取組，児童の状況などを家庭や地域社会に説明し，理解を求め協力を得ること，学校が家庭や地域社会からの要望に応えることが大切である」と示している。

このことから，児童が安心して自分の力を発揮できるように，日頃から学級経営を充実させることが大切であると言える。また，保護者との間で児童に対する指導の在り方について共通理解をする等，保護者との連携を密にすることが大切である。

一方で，小規模小学校の児童は，幼い頃からの人間関係が固定化されがちで，友達を多面的に見ることができにくい傾向がある。このことから，固定化された人間関係をより良い人間関係にするために，仲間関係スキル等を向上させる必要があると考えた。さらに，露口（2009）は，「保護者による学校信頼は小・中学校ともに，児童生徒の学力向上得点による影響をほとんど受けない」と述べている。このことから，学力向上以外の子どもの変化が，保護者による学校信頼に影響を及ぼす可能性に着目した。通常，保護者会や家庭訪問等による交流を通して，保護者との信頼関係を構築することが考えられるが，児童に対する働きかけを通して，日常的に保護者との信頼関係が築けないかと考えた。

そこで，保護者の学校に対する信頼度を高めるためには，児童に対しSST を実践することにより，児童相互の固定化された人間関係をより良い人間関係にすることができるとともに，学校と保護者が信頼関係を構築することに有効ではないかと考えた。

本研究では，保護者が願う子どもの姿を調査し，それらを取り入れたSST プログラムを作成し授業実践することが，児童のソーシャルスキルを向上させ，学校と保護者が信頼関係を構築することに有効な手だての一つとなり得るのではないかと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

小規模小学校において，保護者が願う子どもの姿を目指したSST に取り組み，児童のソーシャルスキルを向上させることが，学校と保護者が信頼関係を構築することに有効であることを実践的に明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

小規模小学校において，保護者が願う子どもの姿を明らかにした上で，保護者が願う子どもの姿を目指したSST を実践し，児童のソーシャルスキルを向上させることで，学校と保護者が信頼関係を構築することができるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　検証尺度について

(1) 保護者信頼度の測定尺度

露口（2010）の「保護者集団構造分析モデル（P-TRUST2010）」の中から17項目を質問項目とし，その中の１項目「運動会や文化祭など学校行事にはできるだけ参加したい」の「文化祭」を小学校行事に合わせて「学習発表会」と換えて，回答を求めた。回答は，「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の４件法で設定し，事前・事後の保護者による学校への信頼度の変容を見るために使用した（表１）。

表１　保護者信頼度に関する質問項目

	項　　目
1	学校の先生に親しみを感じる。
2	学校の行事等には、積極的に参加している。
3	PTA活動に、積極的に協力している。
4	子どもが通っている学校に愛着を感じる。
5	学校の先生は保護者の意見に耳を傾けている。
6	子どもの学力向上に関して、学校に期待している。
7	子どもの心の教育や体力・健康づくりについて、学校に期待している。
8	PTAの役員や委員をやってみたい。
9	もっといろいろな行事・活動で、保護者に協力を依頼して欲しい。
10	自分の特技が役立つのであれば授業にも協力したい。
11	運動会や学習発表会など、学校行事にはできるだけ参加したい。
12	PTA活動にはできるだけ参加したい。
13	悩みや心配事があるときは、学校の先生に相談している。
14	悩みや心配事を、学校・先生と共有できている。
15	学校の先生は、悩みや心配事を理解してくれている。
16	学校から依頼があれば、ボランティアとして協力したい。
17	学校からの通信等には、じっくりと目を通している。

(2) ソーシャルスキル尺度

上野・岡田ら（2006）の「指導のためのソーシャルスキル尺度（小学生用）」を使用した。４領域56項目で構成され，回答は４件法からなり，０～３点を与えている。対象児童について研究協力校の学級担任が評価した。実施前はプログラム作成のための参考とし，実施後は児童のソーシャルスキルの変容を見るための資料として使用した。

２　ソーシャルスキルトレーニング（SST ）について

岡田（2006）によると，ソーシャルスキルとは，「社会生活や対人関係を営んでいくために，必要とされる技能」と定義している。SST は，インストラクション（教示）→モデリング（スキルの見本）→リハーサル（ロールプレイ）→フィードバック（評価・修正）→般化（日常化）という流れで行う。その際，対象児童の発達段階に合わせてより良い人間関係を育むことを意識した活動を取り入れるようにした。

３　平成24年度研究の実際について

(1) SST プログラムについて

ソーシャルスキル尺度による対象児童63名についての調査結果から，下位尺度の点数を合計して粗点を出し，換算表を用いて評価点に換算した（表２）。下学年児童（１～３年）は，最も評価点の低いスキル「コミュニケーション」を指導が必要なスキルとした。また，上学年児童（４～６年）は，「仲間関係」「コミュニケーション」の評価点が低く，個人差の大きい「仲間関係」を指導が必要なスキルとした。そして，それらのスキル向上をねらいとしたSST プログラムを下学年と上学年それぞれ４時間ずつ計画・実施した（表３）。

表２　ｿｰｼｬﾙｽｷﾙ評価点(max=15, ave=10.1)

下位尺度	下学年	上学年
集団行動	9.1	10.7
セルフコントロール	9.8	11.6
仲間関係	8.7	9.6
コミュニケーション	8.5	9.6

(2) 検証授業について

研究協力校全校児童62名を下学年33名，上学年29名に分け，それぞれ一斉授業の形で10月から２月に検証授業を行った。また，スキル定着のためには学校と保護者の連携が大切であると考え，学習したスキルを学校生活だけでなく家庭生活においても一週間取り組ませ，記録するカード（以下，チャレンジカードとする）を使用した（図１）。チャレンジカードには，家庭で取り組む項目と保護者が記入する欄を設け，児童の変容や感想等について保護者に短いコメントを記入してもらった。

表３　H24　SSTプログラム

	実施日	プログラム名（ソーシャルスキル項目）	ね　ら　い	主な活動
下学年	10／28（月）	聞き方名人になろう（聞く）	・先生の話やお友だちの発表の内容を理解できる。 ・聞かれたことに対してきちんと答えることができる。	・そうだねゲーム ・わたしは〇〇がすきです
	11／27（火）	お話し名人になろう（話す）	・言葉たらずでなく，話すことができる。 ・物事を順序立てて説明することができる。	・お話しカード
	2／4（月）	わからないことを質問しよう（自己表現）	・わからないことは質問できる。	・わたしの名前は何でしょう
	2／18（月）	いろんな気持ち（感情のコントロール・自己表現）	・くやしさや怒りを言葉で伝えることができる。	・いろんな気持ちゲーム ・グループ内での気持ちの交流
上学年	10／28（月）	友達を上手に誘おう（仲間関係の開始）	・仲間を遊びに誘うことができる。	・いっしょに遊ぼうゲーム ・ロールプレイ
	11／27（火）	話しかけるときは？（仲間関係の開始）	・臆することなく仲間に話しかけることができる。	・ごちゃまぜビンゴ ・わたしの名前は何でしょう
	2／4（月）	相手のことを知る（仲間関係の維持）	・仲のよいお友達の興味や趣味などを知っている。	・質問じゃんけん ・自己紹介
	2／18（月）	あたたかい言葉かけ（仲間関係の維持）	・仲間と冗談を言い合うことができる。 ・友達が失敗した時に励ましたりなぐさめたりできる。	・ロールプレイ ・いいところカード

ア　下学年

(ｱ)　１時間目

「聞き方名人になろう」では，聞くスキルの向上を図った。二人組や三人組になって，上手な聞き方の四つのポイントに気を付けて練習した。授業後の児童の感想には，「難しいと思ったけれど，どんどん簡単になってきた」「大人になってもつかうから，聞き方は大事なんだなあと思った」とあった。

(ｲ)　２時間目

「お話し名人になろう」では，話すスキルの向上を図った。お話しカードを使って順序よく話すことができ，前時の学習で学んだ聞き方を意識している姿が多く見られた。授業後の児童の感想にも，「順番にお話しすると分かりやすいと知ったので，家でもやってみたい」とあった。

図１　チャレンジカード

(ｳ)　３時間目

「わからないことを質問しよう」では，自己表現するスキルの向上を図った。質問して良いか確かめることや相手が何を聞かれているか分かるようにする等のポイントに気を付けて練習した。授業後の児童の感想には，「質問するといっぱい分かることがあるので，家でも続けたい」「相手が他の人と話していたら，質問できないなと思った」とあった。

(ｴ)　４時間目

「いろんな気持ち」では，感情をコントロールすることと自己表現するスキルの向上を図った。グループ内で表情カードを使って，そのときの出来事といろいろな気持ちについて話し合った。授業後の児童の感想には，「いろいろな気持ちの言葉で家族にも自分の気持ちを表せたらいいなと思った」「うれしいや楽しい以外の言葉をふだんもつかいたい」とあった。

イ　上学年

(ｱ)　１時間目

「友達を上手に誘おう」では，仲間関係を開始するスキルの向上を図った。昼休みに一人でいる友達を誘う場面等，役割を変えながらロールプレイを行った。授業後の児童の感想には，「私は恥ずかしがり屋だけれど，相手と目を合わせることに慣れてきた」「今まで誘い方が分からなかったけれど，一人でいる人がいたら誘うようにしたい」とあった。

(ｲ)　２時間目

「話しかけるときは」では，仲間関係を開始するスキルの向上を図った。ビンゴを利用し，男女・学年の区別なくたくさんの人に話しかけている姿が見られた。授業後の児童の感想にも，「ふだんあまり話さない人に，積極的に話しかけたり笑顔で声をかけたりすることができた」とあった。

(ｳ)　３時間目

「相手のことを知る」では，仲間関係を維持するスキルの向上を図った。仲の良い友達の興味や趣味について知るために，相手の好きなことを質問し合う活動を行った。児童の感想には，「友達のことを知る良い機会になった」「友達の意外な素顔を知ることができた」とあった。

(ｴ)　４時間目

「あたたかい言葉かけ」では，仲間関係を維持するスキルの向上を図った。いろいろな場面で相手の気持ちが良くなる言葉をかける練習をした。授業後の児童の感想には，「ほめる言葉をうまく言えるようになりたい」「よく考えないで言っているので，これから心をこめて言おうと思う」とあった。

(3)　児童のソーシャルスキルの変容

研究協力校において，上・下学年それぞれ４回の検証授業終了後，事後調査を行い下位尺度ごとの評価点の平均をt 検定により比較した結果，指導が必要なスキルだけでなく，全ての下位尺度で評価点の平均が上昇し，0.1 %水準で有意な差が認められた（表４，表５）。

表４　H24ソーシャルスキル尺度 t 検定の結果(下学年児童)

下位尺度	人数	事前平均(*SD*)	事後平均(*SD*)	*t*値
集団行動	33	9.06(2.63)	11.21(1.75)	−5.30 ***
セルフコントロール	33	9.82(2.54)	11.79(1.45)	−5.92 ***
仲間関係	33	8.67(2.50)	10.58(2.56)	−4.12 ***
コミュニケーション	33	8.52(2.08)	10.45(2.15)	−6.58 ***

***p <.001

表５　H24ソーシャルスキル尺度 t 検定の結果(上学年児童)

下位尺度	人数	事前平均(*SD*)	事後平均(*SD*)	*t*値
集団行動	29	10.69(2.59)	12.03(1.80)	−4.63 ***
セルフコントロール	29	11.07(2.51)	12.24(1.83)	−4.31 ***
仲間関係	29	9.59(2.89)	11.45(2.56)	−4.94 ***
コミュニケーション	29	9.62(2.83)	11.79(2.51)	−7.50 ***

***p <.001

(4)　保護者信頼度の変容

研究協力校において，プログラム実施前後に保護者による学校への信頼度についてのアンケート調査

を行い，t 検定により比較した結果，わずかに平均値は上昇したものの，有意な差は認められなかった。

(5) 考察

児童の実態調査を基に，より良い人間関係を育むことを意識したSST プログラムを行った結果，児童が学校生活において話し方や聞き方に気を付けたり，友達を誘うことが多くなったりする様子が見られた。

また，スキル定着のためのチャレンジカードを使用することにより，家庭生活での取組の様子や変容を把握することができた。保護者のコメントからは，「続けてほしい」「もっと友達同士の関わりが増えてほしい」といった要望も見られることから，保護者の関心が高まったと思われる。

さらに，児童のソーシャルスキルを定着させようという研究協力校の各学級担任の意識が高まり，学んだソーシャルスキルに関する掲示物やゲームを活用して事後指導を行うようになった。

しかし，児童のソーシャルスキルの向上は見られたが，保護者の信頼度に関しては，明らかな向上が見られなかった。その一方で，チャレンジカードの保護者のコメントに，児童のソーシャルスキルの向上に対する要望を伝える記述が見られたことから，保護者の要望に応えることで，より保護者の信頼を得ることができるのではないかと考えた。

4　平成25年度研究の実際について

(1) SST プログラムについて

平成25年度研究を行うに当たって，研究協力校保護者48名（児童数62名分）を対象に，「保護者が願う子どもの姿に関するアンケート」を実施した。上野・岡田ら（2006）の「指導のためのソーシャルスキル尺度（小学生用）」を基に，下位尺度12項目を質問項目とし，１位から３位まで順位づけと回答を求めた（表６）。集計の際には，１位を３点，２位を２点，３位を１点とした。

「保護者が願う子どもの姿に関するアンケート」の結果，下学年保護者で得点の高い項目は，順に「対人マナー」「感情のコントロール」「自己表現」であった。上学年保護者で得点の高い項目は，順に「対人マナー」「感情のコントロール」「聞く」であった。「対人マナー」「感情のコントロール」の向上を望んでいる保護者が，上・下学年とも多いことが分かった（図２，図３）。

以上の結果から，得点の高い項目「対人マナー」「感情のコントロール」を中心に取り上げ，SST プログラムを実施した。保護者の願いはそれぞれ違うことから，回答の少ない項目の中から，下学年は「自己表現」「状況を理解する」，上学年は「聞く」「状況を理解する」「役割を果たす」「仲間関係の維持」「自己表現」も取り入れ，できるだけ関連させるようにした。

表６　保護者が願う子どもの姿に関するアンケート

例	順位	項　目	子どもの姿（例）
1		① マナー	・よいことをしてもらったら「ありがとう」と感謝する。 ・適切な言葉づかいをする。 ・物を借りるときはきちんとことわる。　等
		② 状況を理解する	・自分のした行動を振り返る。 ・相手の表情の違いに気づく。（にこにこ顔、こわい顔） ・相手の気持ちを理解する。（喜んでいる、怒しんでいる）　等
3		③ 集団への参加	・途中でぬけたり、やめたりせずに仲間と遊び続ける。 ・相手の話を終わりまで聞いてから話す。 ・与えられたルールに従ってゲームに参加する。　等
		④ 役割を果たす	・仲間同士で決めたルールや決まりを守る。 ・仲間と協力しながら、仕事や課題を行う。 ・日直や係の仕事をやりとげる。　等
		⑤ 感情のコントロール	・嫌なことがあっても、人を非難したり騒いだりしない。 ・友達が嫌がることは、言ったりやったりしない。 ・感情的になっても、気持ちを上手に切り替える。　等
		⑥ 行動のコントロール	・授業中、勝手に席を離れたりそわそわ体を動かさない。 ・授業中、関係ない物音や他の人の行動に注意がそれない。 ・行動する前にじっくり考える。　等
2		⑦ 仲間関係の開始	・知っている人に挨拶したり、ほほえみかけたりする。 ・仲間に話しかけたり、遊びに誘ったりする。 ・遊んでいる仲間に自分から進んで加わる。　等
		⑧ 仲間関係の維持	・仲間と会話を続けたり冗談を言い合ったりする。 ・仲間となかよく遊ぶ。 ・友達が失敗したとき等、励ましたりなぐさめたりする。　等
		⑨ 聞く	・先生や友だちの話を集中して聞く。 ・先生や友達の発表の内容を理解する。 ・聞かれたことに対してきちんと答える。　等
		⑩ 話す	・言葉たらずでなく話す。 ・物事を順序立てて説明する。 ・人前で適切に発表やスピーチをする。　等
		⑪ 自分も相手も大切にした自己表現	・わからないことを質問する。 ・いやなことはしっかりことわる。 ・くやしさや怒りを言葉で伝える。　等
		⑫ 話し合い	・話し合いの内容にそった発言をする。 ・意見をまとめる方法を提案する。 ・話し合いにおいて全体の意見を参考にして結論を出す。等

また，プログラムの順番については，ソーシャルスキルの程度を深めるために，前時に学習したスキルが生かされるよう考慮して配列した（表７）。

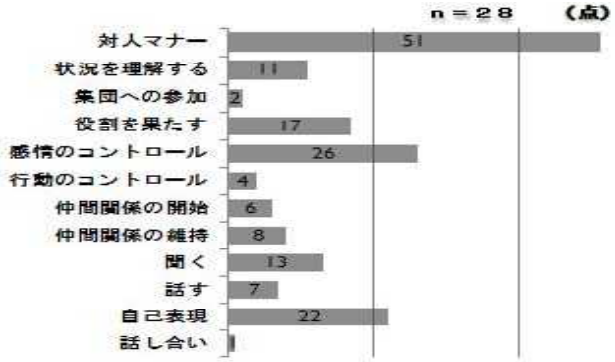

図２　保護者が願う子どもの姿に関するアンケート結果（下学年保護者）

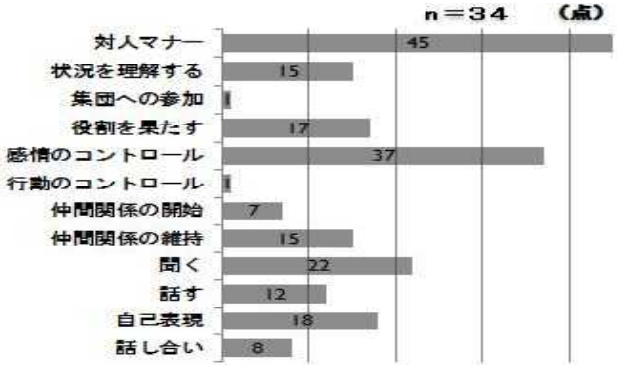

図３　保護者が願う子どもの姿に関するアンケート結果（上学年保護者）

(2) 検証授業について

平成24年度と同様に，研究協力校全校児童62名を下学年28名，上学年34名に分け，それぞれ一斉授業の形で６月から10月に検証授業を行った。また，平成24年度に引き続き，家庭生活においても一週間取り組ませ，記録するチャレンジカードを使用した。

表７　H25　SSTプログラム

	実施日	プログラム名 (ソーシャルスキル項目)	ねらい	主な活動
下学年	6/7 (金)	ふわふわ言葉とちくちく言葉 (対人マナー・感情のコントロール)	・相手の気持ちを理解し、自分もうれしくなるあたたかい言葉をつかおうとすることができる。	・ふわふわ言葉リレー ・あきかんつみリレー
	7/9 (火)	こんなときなんていう (対人マナー・状況を理解する)	・相手や場にふさわしい、あいさつや言葉づかいをすることができる。	・くじびきリレー
	9/6 (金)	わからないことを質問しよう (自己表現)	・わからないことを質問することができる。	・質問じゃんけん
	10/15 (火)	負けても平気 (感情のコントロール・自己表現)	・くやしさを言葉で表し、自分をコントロールすることができる。	・じゃんけんチャンピオン ・カム・オンリレー (じゃんけんリレー)
上学年	6/7 (金)	めざせ！聞き方の達人 (聞く・対人マナー)	・話し合いで相手の話を上手に聞くことができる。	・そうだねゲーム ・ロールプレイ(4人組)
	7/9 (火)	会話のマナー (対人マナー・状況を理解する)	・会話のマナーを知り、適切な言葉づかいで会話をすることができる。	・マナー違反を探せ ・すごろくトーキング
	9/6 (金)	協力してやりとげる (役割を果たす・仲間関係の維持)	・仲間と協力しながら目的を達成することができる。	・ぬり絵 (情報をもとに完成させる)
	10/15 (火)	共感する・ストレス対処 (感情のコントロール・自己表現)	・自分に合ったストレスの対処方法を見つけ、感情的になっても気持ちを上手に切り替えることができる。	・感情ぴったんこ ・リラックスタイム

ア　下学年

(ｱ)　１時間目

「ふわふわ言葉とちくちく言葉」では，対人マナーのスキルと感情をコントロールするスキルの向上を図った。空き缶を上に積んでいくゲームを通して，友達にふわふわ言葉で声をかける練習をした。授業後の児童の感想には，「がんばってと言われてうれしい気持ちになった」「ふわふわ言葉を家でもたくさんつかった」とあった。

(ｲ)　２時間目

「こんなときなんていう」では，対人マナーと状況を理解するスキルの向上を図った。カードでいろいろな場面を設定して，その場にあった言葉を発したり，態度をとったりする練習をした。授業後の児童の感想には，「地域の人や先生にもていねいな言葉で言いたい」「家の人にごめんなさいやおはようございますと言えたのでよかった」とあった。

(ｳ)　３時間目

「わからないことを質問しよう」では，自己表現するスキルの向上を図った。これは，平成24年度の内容を修正して引き続き行った。お互いに質問し合う活動を繰り返して行った。授業後の児童の感想には，「相手に確認してから質問することを学んだ」「うまくできると楽しいので家でもポイントを忘れないでやりたい」とあった。

(ｴ)　４時間目

「負けても平気」では，感情をコントロールすることと自己表現するスキルの向上を図った。くやしい気持ちやいらいらする場面を体験させながら，自分をコントロールする方法を見付ける活動をした。授業後の児童の感想には，「前まではどうすればいいか分からなくて落ち込んでいたけれど，深呼吸すればいいことが分かった」とあった。

イ　上学年

(ｱ)　１時間目

「めざせ！聞き方の達人」では，対人マナーと聞くスキルの向上を図った。これは，平成24年度に下学年で行った「聞き方名人になろう」を上学年の実態に合わせた内容で行った。授業後の児童の感想には，「何回もやっているうちに，苦手なところが分かった」「学校ではできたけれど，家でできなかったのでがんばる」とあった。

(ｲ)　２時間目

「会話のマナー」では，対人マナーと状況を理解するスキルの向上を図った。会話のマナー違反を探す活動の後，すごろくを使って決まったテーマについて話すゲームを通して，会話のマナーに気を付ける練習をした。授業後の児童の感想には，「家でも楽しく話すことができた」「話題に気を付けたい」とあった。

(ｳ)　３時間目

「協力してやりとげる」では，役割を果たすことと仲間関係を維持するスキルの向上を図った。協力しながら自分の役割を果たすために，カードに書かれている内容に合わせてぬり絵を完成させる活動をした。授業後の児童の感想には，「自分だけでなく相手のことを考えて行動できるようにしたい」「友情が深まってうれしい」とあった。

(ｴ)　４時間目

「共感する・ストレス対処」では，感情をコントロールすることと自己表現するスキルの向上を図っ

た。ストレスを感じたときの対処について，いろいろな方法を体験させて自分に合った方法を見付ける活動をした。授業後の児童の感想には，「ストレスを感じることは意外に多いと思った」とあった。

(3) 児童のソーシャルスキルの変容

研究協力校において，上・下学年それぞれ４回の検証授業終了後，事後調査を行い下位尺度ごとの評価点の平均を t 検定により比較した結果，下学年児童では，全ての下位尺度で得点の上昇が認められ，特に「仲間関係」「コミュニケーション」で１％水準で有意な差が認められた（表８）。上学年児童では，「仲間関係」で上昇が見られたが，有意な差は認められなかった。また，「コミュニケーション」で１％水準で有意な数値の下降が認められた（表９）。しかしながら，平成24年度において向上した数値を維持しており，２年間を通しての変容を見ると，どの下位尺度でも得点の上昇が認められ，１％水準で有意な差が認められた（表10）。

表８　H25ソーシャルスキル尺度 t 検定の結果（下学年児童）

下位尺度	人数	事前平均(SD)	事後平均(SD)	t値
集団行動	28	9.14(2.66)	10.32(2.79)	−1.79
セルフコントロール	28	10.14(2.42)	10.36(2.09)	−0.38
仲間関係	28	8.61(2.13)	10.61(2.90)	−3.55 **
コミュニケーション	28	8.32(2.34)	9.96(3.04)	−3.87 **

$^{**}p<.01$

表９　H25ソーシャルスキル尺度 t 検定の結果（上学年児童）

下位尺度	人数	事前平均(SD)	事後平均(SD)	t値
集団行動	34	11.94(1.59)	11.88(1.67)	0.28
セルフコントロール	34	12.09(1.90)	11.97(1.59)	0.52
仲間関係	34	11.88(2.02)	12.32(1.36)	−1.35
コミュニケーション	34	11.76(1.78)	10.88(2.33)	3.12 **

$^{**}p<.01$

表10　２年間を通してのソーシャルスキル尺度 t 検定の結果

下位尺度	人数	事前平均(SD)	事後平均(SD)	t値
集団行動	53	9.75(2.72)	11.17(2.35)	−3.68 **
セルフコントロール	53	10.28(2.66)	11.26(2.02)	−2.86 **
仲間関係	53	8.92(2.57)	11.47(2.42)	−6.27 ***
コミュニケーション	53	8.92(2.40)	10.77(2.75)	3.12 ***

$^{**}p<.01$ $^{***}p<.001$

(4) 保護者信頼度の変容

ア　検証尺度の結果より

研究協力校保護者48名の事前の回答を質問ごとに見た結果（図４），「非常にあてはまる」「ややあてはまる」を合わせ，肯定的な評価をした保護者が80％以上となった項目は，順に「子どもの心の教育や体力・健康づくりについて，学校に期待している」「運動会や学習発表会など，学校行事にはできるだけ参加したい」「学校の先生は保護者の意見に耳を傾けている」「学校からの通信等には，じっくりと目を通している」「子どもの学力向上に関して，学校に期待している」「学校の先生に親しみを感じる」「子どもが通っている学校に愛着を感じる」「学校の行事等には，積極的に参加している」の８項目であった。

逆に，「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を合わせ，否定的な評価をした保護者が40％以上となった項目は，順に「PTA の役員や委員をやってみたい」「もっといろいろな行事・活動で，保護者に協力を依頼してほしい」「自分の特技が役立つのであれば授業にも協力したい」「悩みや心配事があるときは，学校の先生に相談している」「悩みや心配事を，学校・先生と共有できている」「学校の先生は，悩みや心配事を理解してくれている」の６項目であった。

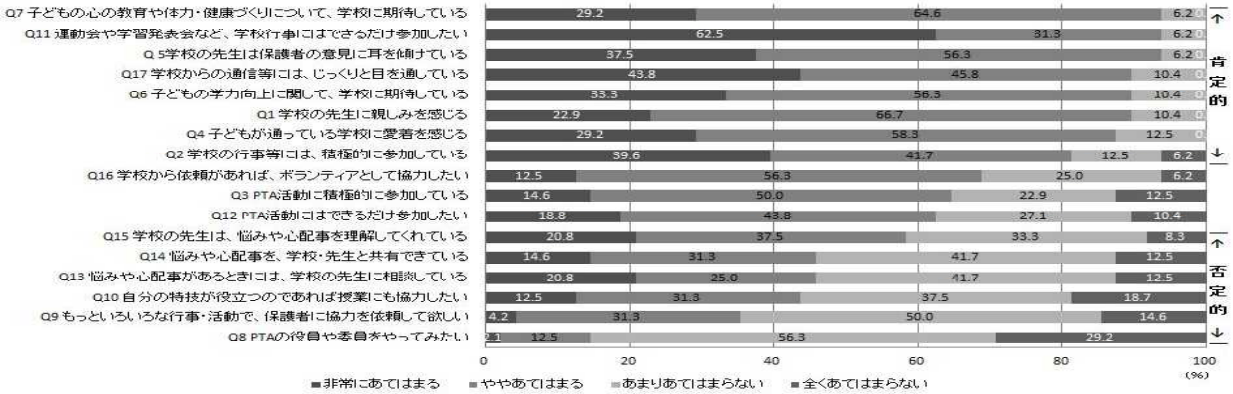

図４　H25保護者による学校への信頼度（事前）

事後の回答を質問ごとに見た結果（図５），「非常にあてはまる」「ややあてはまる」を合わせ，肯定的な評価をした保護者が80％以上となった項目は，順に「運動会や学習発表会など，学校行事にはできるだけ参加したい」「学校の先生は保護者の意見に耳を傾けている」「子どもが通っている学校に愛着を感じる」「学校からの通信等には，じっくりと目を通している」「子どもの心の教育や体力・健康づくりについて，学校に期待している」「学校の先生に親しみを感じる」「学校の行事等には，積極的に参加している」の７項目であった。

逆に，「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を合わせ，否定的な評価をした保護者が40％以上となった項目は，順に「PTA の役員や委員をやってみたい」「もっといろいろな行事・活動で，保護者に協力を依頼してほしい」「自分の特技が役立つのであれば授業にも協力したい」「悩みや心配事があるときは，学校の先生に相談している」の４項目であった。

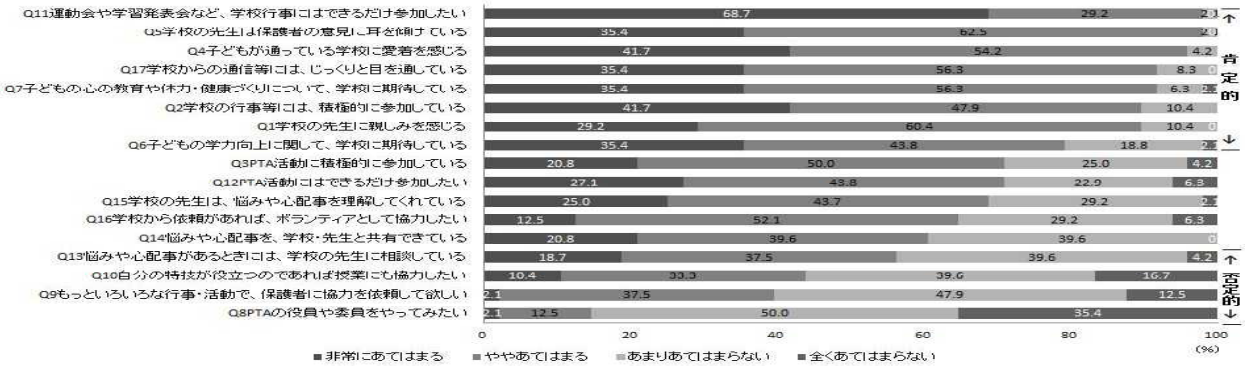

図５　H25保護者による学校への信頼度（事後）

また，アンケート調査結果を検証授業前後で質問項目ごとにt 検定により比較すると，17項目中12項目で平均値が上昇した。特に，「子どもが通っている学校に愛着を感じる」「悩みや心配事を，学校・先生と共有できている」においては５％水準で有意な上昇が認められた（表11）。

表11　H25保護者信頼度の t 検定の結果

質問項目	人数	事前平均(SD)	事後平均(SD)	t値
Q4 子どもが通っている学校に愛着を感じる	48	3.17(0.63)	3.38(0.57)	−2.22 *
Q14 悩みや心配事を、学校・先生と共有できている	48	2.48(0.90)	2.81(0.76)	−2.37 *

*$p<.05$

イ　保護者の感想より

チャレンジカードの保護者欄に記入された中で，保護者の意識に変容が見られたと思われるものについて，以下に記載する。

- 同年代の人との関わりを苦手としているので，この機会に繰り返しチャレンジして苦手意識が少なくなれば良いと思う。学校でのチャレンジが始まってから，少しずつであるが自分なりに人との関わりについてがんばっていると感じられる。
- 子どもが自分の言葉遣いを気にするようになった。「それちくちく言葉だよ」と注意すると，素直に「ごめんなさい」と言えるようになった。
- ふわふわ言葉を上手に使っていた。私も見習わなくてはと思った。
- 家での手伝いや作業をしてくれて，とても助かっている。これからも続けてほしい。
- とても子どものためになる取組です。まだまだ続けてほしいチャレンジです。
- 子どもから声をかけられることが多く，学校での授業だったのかと納得した。落ち込まないように励まされて楽しい気分になった。

(5) 考察

「保護者が願う子どもの姿に関するアンケート」の結果から得点の高い項目，「対人マナー」「感情のコントロール」等のスキル向上をねらいとしたSST プログラムを実施したが，児童のソーシャルスキルに大きな向上は見られなかった。これは，平成24年度のプログラムですでに児童のソーシャルスキルが向上しており，平成25年度のプログラムを計画した時点でスキルが上昇し，日常化された状態であったためであると考えることができる。しかしながら，平成24年度において向上した数値を維持しており，研究を実施した２年間を通しての変容を見ると，大幅にソーシャルスキルが向上したことから，児童に対して一定の効果があったと推察することができる。

また，研究協力校における保護者による学校への信頼度の結果から，「非常にあてはまる」「ややあてはまる」を合わせ，肯定的な評価をした保護者が80％以上となった項目と「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を合わせ，否定的な評価をした保護者が40％以上となった項目のどちらにおいてもわずかな上昇が見られた。特に，「子どもが通っている学校に愛着を感じる」「悩みや心配事を，学校・先生と共有できている」で有意な向上が認められたことから，保護者の願う子どもの姿を基にしたSST プログラムの実施とチャレンジカードの使用に一定の効果があったと推察することができる。

チャレンジカードに記述された保護者の感想を見ると，子どものソーシャルスキルの変容に関する内容が多い。また，保護者自身の気付きに関する内容もあることから，児童に対するSST を通して，学校と家

庭で協力して取り組むきっかけになったのではないかと思われる。

Ⅴ　研究のまとめ

本研究では，小規模小学校において，保護者が願う子どもの姿を明らかにした上で，小規模小学校の児童に対してSST を実践して，児童のソーシャルスキルを向上させることが，学校と保護者が信頼関係を構築することに有効であるかどうかを検証した。

結果，「子どもが通っている学校に愛着を感じる」「悩みや心配事を，学校・先生と共有できている」では学校に対する保護者信頼度に有意な向上が認められたが，全体の数値では明らかな効果を認めることはできなかった。

チャレンジカードの保護者の感想を見ると，学校でソーシャルスキルトレーニングに取り組んだことで子どもに変容が見られたといった内容が多くあった。また，チャレンジカードに学んだスキルのポイントを示し，家庭でも同じ観点で取り組ませたことで，SST に対する保護者の関心が高まり，学校に対する意識も少しずつ変容していると推察することができる。

また，プログラム実施においては，児童のソーシャルスキル定着のために研究協力校での般化の工夫も一助となった。各学級担任への聞き取りによると，学んだスキルに関して学級・学校内の掲示物や学習場面において想起させる場面を取り入れる等の工夫を行い，さらに，学級・学校通信での情報提供もしていることから，保護者による学校への信頼度を測る項目のうち「子どもが通っている学校に愛着を感じる」について有意に向上が認められたものと推察することができる。

Ⅵ　本研究における課題

- 保護者が願う子どもの姿を目指したSST を実践したが，学校や児童の実態も考慮したプログラムの内容の吟味や，実施時期や回数等の見直し，教育課程上のどの時間に設定するかが課題である。プログラムを行う時間を計画的にとり，日常的に指導するための検討が必要である。
- 児童のソーシャルスキルと保護者信頼度の変容を調査したが，日常的に行うためには学校評価等を利用する等，各学校の実態に合った項目や内容の選定をしていくことが良いと考える。
- 保護者の学校に対する信頼度について大きな変容が見られなかったが，一部では効果が見られたことから，日常的に保護者との情報のやりとりを継続することが必要である。

＜引用文献＞

１　文部科学省　2008　『小学校学習指導要領解説総則編（平成20年８月）』，p.57，p.18

２　露口健司　2009　「保護者が抱く組織イメージと学校信頼の関係－個人・集団レベルデータを用いた分析－」『愛媛大学教育学部紀要56』，pp.27-36　愛媛大学

３　上野一彦・岡田智編書　2006　『特別支援教育［実践］ソーシャルスキルマニュアル』，pp.140-143，pp.17-18，明治図書出版

＜参考文献・URL ＞

愛媛県教育委員会　2010　「平成22年度　よりよい学校づくりのために－学校運営の改善の検証－（平成23年３月）」，pp.32-33
ehime-c.esnet.ed.jp/gimu/src/09documents/10school_check3.pdf（2013.12.6）

國分康孝監修　小林正幸・相川充編著　1999　『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　小学校　楽しく身につく学級生活の基礎・基本』　図書文化

上野一彦・岡田智編書　2006　『特別支援教育［実践］ソーシャルスキルマニュアル』　明治図書出版

河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編書　2007　『いま子どもたちに育てたい　学級ソーシャルスキル』　小学校低学年・中学年・高学年　図書文化

坂野公信監修　日本学校GWT 研究会著　『協力すれば何かが変わる《続・学校グループワーク・トレーニング》』　遊戯社